

## シンポジウム

# 看護実践と研究をつなぐ —大学教員の立場から—

名古屋市立大学看護学部

益田 美津美

本シンポジウムでは、大学教員の立場から患者を対象とする研究に取り組む上での困難や課題などについて講演させていただいた。

私は、大学院在学中から現在まで、未破裂脳動脈瘤患者がどのような体験をしているかということについて研究をしてきた。この間、継続して他施設であるA大学病院を主要なフィールドとしている。なぜA大学病院を選択したのかというのは、元々働いていたからということもあるが、フィールド選択の基準で最も基本となるのは、対象者あるいは現象の発生頻度が最大であるということだと考える。この点でA大学病院は、患者数は全国的にもトップクラスであり、未破裂脳動脈瘤の専門外来をもっている。加えて、フィールド選択時は、距離や時間、費用、親密性などを含めて検討することが多い。私の場合、フィールドの選択候補であったA大学病院と当時の所属施設は隣接しているため、距離や時間、交通費は問題なかった。というよりもむしろ、最適な環境で研究が行えていた。その後も所属施設とフィールドは1時間程度で通っていたため、距離や費用はそれほど負担ではなかった。しかし、今現在は名古屋市立大学に所属しているため、距離や費用、時間という点では大変にはなったが、現在でもA大学病院をフィールドとした研究を継続している。本学着任時に東海近辺で新たにフィールドを開拓することも考えた。しかし、患者数や交通の利便性などを考えると、A大学病院の方が効率がよいという結論に至り、今でもフィールドに足を運んでいる。

次にフィールド開拓にあたっては、慎重に、丁寧

に行った。事前にどのように進めるべきか情報収集や相談をした上で、まずは看護部長に直接アポイントメントをとった。なぜなら、看護部長といくら面識があったとしても、部長の立場から考えると、自分が知らないところで外部の者が内部の者と研究の話をしているのは良くは思わないだろうと思ったからである。ファーストコンタクトは誰にするか、ということについては、その組織や政治的なこと、部署や個人の関係性によって異なると思うが、慎重に行うに越したことはない。また、必要な書類は完璧に準備しなければならない。もちろん、体裁を整えるだけでなく、研究計画がしっかりしたものでなければならない。研究計画の明確性、完璧な書類、とともにちょっとした熱意、この3点は重要なポイントであると今でも思っている。そして、看護部長との面談の際は、関連部署の責任者への連絡時期と方法、倫理委員会出席者など、確認事項をリストして臨んだ。

倫理審査承認後は場に入る交渉になる。慣れてくれば問題ないことも最初の段階では一つ一つ確認しながら行った。職員にどのように周知するか、居場所やデータ収集場所などについて責任者と打ち合わせをした。また、私の立ち位置も明確にしておかなければ迷惑をかけてしまうため、私は研究者として場に入るということ、直接ケアはしないということの説明をした。最初の頃は居心地の悪さもあったが、最近では多忙な時は少し手伝ったりもする。立ち位置もわからずにケアに手を出すのは場を混乱させるだけだが、分かったうえでできることをするという分別はつくようになったと思っている。

このようなフィールドへの交渉とともに、努力しなければならないのは、私自身の研究時間の確保である。優先すべき職務は学内のことであるため、平日はフィールドへはなかなか行けないが、時間を調整して、私の体力、気力が許す限り行くようにしている。このような状況もあり、現在行っている研究は、e-learning という形をとっている。患者が頭痛の度に外来に来なくてすむように、そして、私自身もいつでもデータ収集に行けるわけではないため、双方にとってメリットがあると思い、この研究計画に着手したという経緯もつけ加えさせていただく。

患者を対象とした研究を継続していく上で、もう一つ難しいと思うことが、信頼を得て協力を維持することである。「研究のために診察・ケアが中断することがないように注意する。」と言うのは簡単だが、実行するのは難しく、現実的には看護師の方々に助けていただくことも多い。逆に、現場の方々と信頼関係を築くには意図的にコミュニケーションをとることも大事である。その際、注意したのが、挨拶、謙虚さ、必要なものは自分で準備する等基本的なことはもちろんだが、一定の距離を保つ、相手を知って自分を知ってもらう、政治的・組織的・個人的に中立であるということは注意した。特に、場に馴染んでくると、職員同士の会話が耳に入ったり話題を振られることもある。しかし、職員の仕事を評価しないということは肝に銘じておかなければならない。このようなことに注意しながら場に入っているが、ただぼんやりしているわけではなく、対象者をリクルートする合間などには組織的な力の構造を観察していた。それは、誰がフォーマルなリーダーなのか、インフォーマルなリーダーなのか、誰が研究に興味がありそうか、なさそうかを知り、誰に何を交渉すれば話が済みやすいかを検討するのに役立つためである。相手を知る、自分を知ってもらうということを続けていると、現場の方々の方から研究について質問して下さることも増えてきた。そういう人を巻き込んでいき、今では共同研究者になってくださっている。その際も、どこまで協力を得るか、どのように看護部の許可を得るかは慎重に進めるようにした。

最後に、研究成果の還元についてである。これについては、研究者自身に対する義務、研究フィール

ドに対する義務、参加者に対する義務がある。この中で、研究者自身に対する義務としては、研究成果の公表という義務を十分に果たせていないため、今後の課題として努力していきたい。研究フィールドである関連部署、看護部に対しては、データ収集の開始時、終了時、成果公表時は必ず報告と返礼をしてきた。研究参加者の方へも、可能な限り、研究のまとめや別刷りをお渡ししている。

研究開始当初は、完全に、研究者という立ち位置をとっていたが、今では看護部の許可もいただいた上で、研究結果を踏まえて、不安が強い方、混乱が大きい時期、意思決定時などは、研究者という立ち位置ではなく患者に関わっている。このようにして、細々と研究を続けてきたが、患者から「あなたに言われた通りに、半年経って気持ちが落ち着いてきました」などと言っていただけで、研究を続けてきてよかったと思う。そして、研究成果を看護支援につなげられる環境にあることが、今は何より有難い。

## フィールドの選択

### フィールド選択の基準

- 研究対象/現象の発生頻度が最大である
- 距離、時間、費用
- 親密性（自施設 or 他施設）

## フィールドの開拓

### フィールド開拓の手続き

- 研究実施依頼のファーストコンタクトは誰にするか  
→組織の体制、政治、部署の関係性など考慮する
- 必要書類の完璧な準備  
→必要書類（研究依頼書、研究の概要、履歴書、倫理申請書、研究計画書）とその明確性、正確性
- 関連部署の責任者への連絡時期と方法
- 倫理委員会出席者
- 立ち入り許可証  
→研究協力員



## 場に入る

### 交渉

- 研究者は部外者であるため最初の打合わせは慎重に
- いつ、誰に、どのように研究について周知するか
- 居場所とデータ収集の場の確保

### 立ち位置の明確化

- 研究者は看護ケアを行わない or 行う

### 研究時間の確保

- 研究に費やす時間を捻出する
- 職務の優先順位を考える



## 研究活動の輪を広げる

### 信頼の確立と維持

- 一定の距離を保つ
- 初期は相手を知って、自分を知ってもらう
- 政治的、組織的、個人的に中立であることを示す
- 研究者は職員の仕事を評価しない

### 研究協力依頼と共同研究者

- 組織的な力の構造を観察する
- 誰にどこまで協力を得るか
- どのように許可を得るか

## 研究成果の還元

### 研究者自身に対する義務

- 研究成果の公表

### 研究フィールドに対する義務

- データ収集終了時、成果公表時は結果を報告する
- 必要時、可能時は返礼をし、礼儀を尽くす

### 参加者に対する義務

- 研究結果の還元 →研究のまとめや別刷りを渡す

研究成果を実践に適用できる環境をつくる、行動する